The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭の辞
Author(s)	浅野, 遼二
Citation	メタフュシカ. 1996, 27, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66581
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭の辞

浅野遼二

大学の改革問題に着手するときには、大学の使命や大学の自治や学問の自由という、思想上の根本原理に言及するのが、大学人にとって、当然のことになっていた。今回の大学改革において、この理念が正面切って論じられることはなく、この上からの改革に対して散発的な抵抗が試みられたにすぎない。それも社会の共感を呼ぶことはなく終息している。過去、大学闘争の中で変革の意識を抱いて求められた講座制解体は、時の経過の中で皮肉にも対極に位置していた思想によって導かれ、現在、その改革は着実に進行している。

時代の子である哲学もまた、大学内において教育と研究を続行するかぎり、その影響をまぬがれることはできない。大学の開放と管理の既定方針のもとに「教育と研究の分割」は浸透してきている。高度な技術－科学文明を推進する特殊化された専門諸科学と企業工場の分業諸過程の論理が、この開放と管理と分割とを強い力で促している。これが時代と社会の要請であり、これに応ずることが大学の使命であると思われている。

孤独と自由の理念のもとに「教育と研究の一致」を目指したフンボルトの大学の理想像は、遥か遠い昔の出来事となっている。孤独と自由の幻想の中で自治が消失したように、喧騒と統制とが入り乱れる中で自治の精神は忘れられている。

しかし、学の伝統を創設した者を祖にもつ者は、もう一度、大学の理念を構築する基盤を作り、それに向けて努力をしなければならない。哲学を学ぶ者は、この運命から身を逸らすことはできない。

大学の根本問題を論ずるときに必須の批判的自省の視野から、大学を「真理の認識と啓蒙と自己批判的反省とに役立つ責務をもつ機関」として規定した現代の哲学者の洞察が吟味されてしかるべき時がきている。つまり、それは、開かれた理性にしたがって思惟し行動することを自らに課して、教育と研究とを通じて道徳的精神的活力を大学に蘇らせることを意味する。

共感と連帯とを呼ぶ理念が未だ創出されていなくとも、大学人は、教育と研究の現実的成果を示し、それを継続する責務を負っている。改革された大講座制と共に誕生した、この学術研究誌は、古代と中世と近代の大哲学者とその業績とをイメージさせる名のみではなく、その内容を備えることが義務づけられている。彼らの哲学が教育と研究の一致した成果とその時代精神とを反映しているように、われわれの『メタフュシカ』もまたそうなることを目指している。

哲学講座刊行の『メタフュシカ』は、その前身となる旧哲学哲学史第一講座刊行の『カルテシアーナ』と、旧哲学哲学史第二講座刊行の『哲学論叢』、『カンティアーナ』の後から登場し、旧倫理学講座の参加を得て、これらの学術研究誌を統合する役割をになっている。変化する時代精神の中で「教育と研究の一致」という新しい第三の結晶作用が、毎年、実を結ぶことを祈念している。

平成八年九月